

11

「男」が「少女マンガ」を読むということ

伊藤公雄

私の研究領域は社会学である。特に、広い意味での文化現象を、これもまた日常生活の支配／被支配関係も含む広い視野にたった政治と結び付けて考察するという仕事をしてきた。こうした研究のなかのひとつに、男性性研究がある。文化と男性性、さらに男性性と広い意味での政治ということ、1970年代後半からテーマのひとつとして研究してきた。この報告でも、男性および男性性研究 (men & masculinities studies) の視点から、少女マンガを考えてみようと思う。男性はどのようなときに少女マンガを読むのか、また、男性にとっての少女マンガの魅力とは何か、さらに、少女マンガとの接触は男性および男性性にどのような影響を生み出すのか、といったことを示してみたいと考えている。このことは、逆に、少女マンガにとっての男性および男性性とは何かという問題とも関係するのではないかと考えている。

この報告は、少女マンガの読者、特に1970年代から80年代初頭の少女マンガ読者としての経験に基づくものである。とはいっても、そこには国際的な同時性や普遍的な課題も含まれると考えている。

2009年の夏、日本で、ある本が注目を集めた。小熊英二氏の『1968』(小熊2009)という本である。タイトルからわかるように、40年前の若者の反乱を描いたものである。この時代の若い世代の反乱を描いた本の流行は日本だけのものではない。最近、経済の発達した諸国において、あの世界同時に発生した若い世代の異議申し立てについての関心が、学術分野においても広がっているのである。私のこの報告も、「あの時代」のことと深く関わっている。

私が、かなり本気で、少女マンガを読み始めたのは、1970年代初頭、まさに、

1960年代のカウンターカルチャーの爆発と、若者の政治的反抗の波がまだ継続している真っ最中のことだった。1960年代後半から70年代、私も、新左翼の学生運動の真っ只中で生活していた。当時、学生活動家であった私には、二つほど「噂」があった。もっとも、それほど広範囲に広がっていた噂ではなく、当時、一緒に行動していた女性解放運動の一部の活動家の間だけの話だったようだ。噂のひとつは、「ベッドの下に膨大な少女マンガが置いてあって、伊藤はそれを読みながらマスターベーションをしている」という「噂」であった。もうひとつは「部屋に等身大の鏡があって、伊藤は、毎晩、裸になって、鏡に映った自分の姿にうっとりしている」というものであった。実際、リブであるとともにレズビアンな活動家だった友人が、ぼくの部屋を訪ねたとき、彼女は最初にこう言ったものだ。「等身大の鏡はどこにあるの?」と。部屋に鏡はあったが、それほど大きなものではなかった。また、少女マンガでマスターベーションはしたことはない。そもそも、当時の少女マンガには、ほとんどエロティックな場面は描かれることはなかった。レズビアンな活動家だった彼女は、もしかしたら、ぼくが、男女間の恋愛ものではなく、いわゆる少年愛ものを見て、マスターベーションをしていると想像していたのかもしれない。後でもふれるように、日本の少女マンガにおけるエロティシズムは、この時期、男女間のものより、むしろ少年愛ものの方がより目だったのは事実だった。二つの噂は、ともに噂でしかなかったのだが、ただ一つ、「ベッドの下に膨大な少女マンガがある」というのは、事実であった。当時、毎週、『少女フレンド』と『マーガレット』は講読していたし、『別冊少女フレンド』『なかよし』『りぼん』、さらに一番のお気に入りだった『別冊セブンティーン』などの月刊誌も、手当たり次第買って読んでいたからだ。

こんな話から始めたのは、日本の少女マンガの発達を考えると、やはり1960年代後半から70年代のカウンターカルチャーのことを考えざるをえないと思うからである。当時、世界中で、若者たちは、自前の文化、自前の政治をめざして、大きく動きを開始した。この影響は、当然、日本社会もまた大きく揺り動かした。なかでも、反乱の中軸をになった新左翼運動は、そのなかから女性解放運動を生み出した。他の国と同様、日本の女性解放運動は、新左翼運動のなかから、その男性主導の傾向を批判することで誕生したのである。

しかし、日本における若者の反乱や新しいカウンターカルチャーの動きは、1972、73年頃から、急速に衰弱していく。もちろん、こうした傾向は、他の国々でも同様であった。しかし、日本の場合、その衰弱の傾向は、眼を覆うばかりに悲惨なものであった。その背景には、日本の新左翼の一部に存在した武装蜂起路線の失敗と、新左翼内部での殺し合いという悲惨な歴史があったのは事実である。女性解放運動も、1970年代初頭には、メディアの関心を引いた時期がある。しかし、多くのメディアは、女性たちの自由を求める声を、「笑い者」にすることで、抑圧し、日本における女性解放運動もまた、急速に力を失っていった。しかし他方で、日本社会において、カウンターカルチャーや若者の反乱を吸収するような新たな動きがあったのではないかと、私は考えている。簡単にいえば、文化の商品化の拡大ということである。他の経済の発達した国々もまた、この時期、消費社会、メディア社会へ向けて大きな変貌を遂げる。私は、この変化を「1970年問題」と呼んだことがある。1970年を前後して、多くの経済先進国において、ものの見方、考え方、言い方、行動の仕方を含む、広い意味での文化変動が引き起こされたのである。日本の場合、この変化はきわめて大きかったと思う。しかも、消費文化の担い手として、若者と女性が急浮上したという特徴が私たちの社会にはあったように思う。

日本は、現在、国連のジェンダー・エンパワーメント指数では58位、世界経済フォーラムのグローバル・ジェンダー・ギャップ指数では、2009年は101位である。今や、きわめて女性の社会参加の少ない国として知られている。しかし、1970年の段階で、経済の発達した諸国を比べるとOECD加盟国の経済発展上位24カ国のなかで、日本の女性の労働力率はフィンランドに次いで2位、3位のスウェーデンよりも、仕事をもつ女性の割合が高かったのである。ご存知のように、1970年代以後、多くの国々は女性の社会参画を拡大した。しかし、日本では、この30年で、5%くらいしか働く女性の割合は増加していないのである。それでは、何が、女性の不参加分を埋めたのだろうか。簡単に言うと、男性の長時間労働が女性の社会参加不足を埋めたのだ。

なぜ、こんなジェンダー分析をするかといえば、1970年代以後の日本の女性の消費文化の爛熟を説明するためである。女性たちは、この時期以後、社会参加の抑制という状況におかれた。しかし、不思議なことに、日本の女性たち

は、他の国の女性と比べて、この状況に対する強い反対の声をあげることが少なかったのである。もちろん、その背景には、結婚した女性の場合、家計を主に女性が担うという家計管理の仕組みもあったと思う。長時間労働で働く男性の労働によって得た収入により、結婚した女性たちは、比較的自由にお金を使うことができるようになったのだ。こうした動きと連動して、女性を対象とした巨大な消費文化が日本には生まれた。70年代以後の女性の消費文化の爛熟は、男性の長時間労働と女性の社会からの排除の裏返しとして発生したと考えることもできるのである。

若者文化の爛熟もこの時期発生した。かつてのカウンターカルチャーの担い手の多くは、他の国々同様、消費文化をリードする形で、消費文化シーンに登場してきた。また、親の収入の上昇や、アルバイトなどによる資金の確保にともない、若者たちもまた、こうした消費文化の受け手として浮上してきた。政治の時代の終わりは、日本の若者の消費文化の爛熟と結びついていたのである。

1970年代以後の日本社会における、こうした若者消費文化および女性の消費文化の爛熟こそ、日本のポピュラーカルチャーの飛躍の契機になったのだと私は分析している。この時期、政治や自前の文化から距離をとり始めた若い世代は、アニメやマンガ、ゲームにどっぷりはまり、ストーリーやキャラクターの細部にまで強い関心をもつようになった。ただし、受容者たちが、全く創造性や想像性がなかったかといえ、それは違うと思う。彼らは、商品化された世界を自前の独自の視点から楽しんだり、商品化された消費の対象を自分なりに加工したりするという、ある意味で自前の領域は確保していたからである。つまり、オタク文化が開始されたのだ。受け手の成熟は、ポピュラーカルチャーの一層の成熟に結びつく。これが、今をときめく、ジャパンクールのひとつの源流になったのだと私は考えている。

女性文化の成熟もまた、同じような経路をたどったように思う。女性たちは、社会参加の道を塞がれた。しかし、夫や親たちからそれなりの自由になるお金を確保した女性たちは、重要な文化の消費者として浮上してきた。70年代から80年代、急増した女性雑誌はその象徴といえる。特に、1970年代後半には、それまで圧倒的に多数派だった少年向けマンガ雑誌に対して、少女マンガ雑誌が急増していく。青年コミックスに対応するレディースコミックスも次々誕

生した。現在、日本の本屋さんに行くと、男性向けのマンガ雑誌よりもはるかに多くの女性向けコミックスが山積みされていることに気がつくと思う。この傾向が開始されたのは、まさに1970年代後半から、80年代のことだった。

ただし、1970年代以後の日本の女性文化や少女文化は、男性の若者文化とは、明らかに異なる点が見られる。そこには、社会から排除されたものの視点が垣間みられるのである。

男性写真評論家である飯沢耕太郎氏は、『戦後民主主義と少女漫画』（飯沢2009）のなかで、大島弓子にふれて、こんなことを書いている。

「最初は主人公が自分や周囲に違和感を覚えていて、肯定されている自分という実感がもてない。だからいろいろな混乱が起こりますが、最後には主人公が自分で『生きてみよう』という意志を持ち、自分と周囲との関係のあり方をそのままの形で肯定するようになります」（46頁）。

この発言は、飯沢氏より少し年上で、60年代の若者の反乱やカウンターカルチャー運動のなかに身をおいた、男性である私にとっても、きわめて理解しやすい視点である。女性解放運動の声をどこかで経験した後の日本の少女マンガには、実際、現状の男性主導社会に対する「違和感」をとまなうものが少なからずあった。当時、新たな日本の少女マンガシーンを切り開いた、大島弓子、萩尾模都、竹宮恵子、さらに山岸涼子といった作家たちの作品には、こうした現状への違和感がつねに存在していた。ただし、それは、ストレートなフェミニズムの表明にはつながらない。女性解放のあからさまな主張は、多くの女性読者をとらえることはできないからだ。だからこそ、違和感の表明の後には、「肯定」の気持ちが表示されるのである。ただし、そこには、社会の「周縁」にいる者のみがみえる、「真実」のようなものが描かれていく。まさに、ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）が、「男性支配」論文のなかで論じた「排除されたものの明晰さ」、つまり、男性主導社会のマジョリティから排除された女性たちには、マジョリティである男性たちには見えないものを見出す力があるという構造が、ここには映し出されていたのである。

当時、少女マンガの熱心な男性読者であった私は、今から振り返ると、この時代の少女マンガのなかに提示された、現状への「違和感」に強く惹かれたのだということがよくわかる。

たとえば、当時の週刊少女雑誌に連載された「ベルサイユのバラ」や「エースをねらえ！」について考えてみよう。両者ともに、ある意味で、少年マンガにもよくみられた闘いの歴史のものであり、スポーツものである。しかし、両者ともに、主人公たちには、自分と自分を取り巻く社会への違和感が、つねに存在している。その違和感の場所は、何よりも彼女たちが女性だったということから来るところが大きいのである。

男性である私と少女マンガの出会いは、その意味で、大きいものだったと思う。もしかしたら、私の男性性研究の出発点のひとつを、この少女マンガとの出会いは生み出したのかもしれない。男性主導社会において、男性たちの多くはマジョリティに属している。だから、男性性研究は、マジョリティ研究にならざるをえない。この点は、社会のマイノリティの立場からの研究になる女性学と、男性学・男性性研究 (men & masculinities studies) との根本的な違いである。マジョリティからみてつねに周縁におかれるマイノリティは、自分の属性と向き合うことを迫られる。自分たちが社会の主流からはずされていることは、さまざまな疎外感や被差別意識を産むからである。しかし、マジョリティは、よほどのことがないと、自分のマジョリティ性に気づくことはない。マジョリティであることは、社会的疎外や差別を感じる契機がほとんどないからである。だからこそ、マジョリティの側に属する者によるマジョリティ研究はマイノリティ研究と比較して、むずかしいのである。

私は、ある意味で、少女マンガという回路を通じて、男性主導社会を男性の側から考えるというチャンスを得たのかもしれないと思っている。なかでも、この70年代初頭の日本の少女マンガの発達が、先にふれた少年愛ものから開始されたということも、私にとって、大きな意味をもっていた。つまり、マジョリティである異性愛社会に対する、男性同性愛という周縁からの視線が、男性読者である私に、ジェンダーおよびセクシュアリティの中に潜むマジョリティ社会の無関心に眼を向けさせてくれたと思うからである。

実は、このことは、当時の少女マンガの作者たちにとっても、大きな意味をもっていたはずだ。実際、萩尾望都は、1991年、ある雑誌のインタビューに答えて、「当時のジェンダー構造のゆがみの問題を、直接、男性対女性という構図で描くのは困難であったために、男性同性愛というテーマに向ったのだ」

(萩尾・蔦森 1991) ということをはっきりしている。70年代当時、少女マンガ作家たちが、こうしたことを意識的に把握していたかはともかく（実際、萩尾のこの発言は、ちょっと「後知恵」的印象もある）、少なくとも無意識のうちにおいて、ジェンダー課題が、彼女たちの作品のうちに反映していたことは確かだろうと思う。そして、当時のカウンターカルチャーの終焉の時期に、消費化された「男性文化」からの一種の疎外感を抱いていた私に、当時の少女マンガが、「男性性」の見直し、現状のジェンダー構造の批判的とらえ返しの契機を与えてくれたのは事実なのである。

私が少女マンガに熱中したのは、1970年代初期から80年代初期のほんの10年ほどであった。興味深いことだが、実は、日本社会では、70年代後期から80年代にかけて、若い男性の間でも、少女マンガブームが起きた。彼らの中に人気があったのは、陸奥A子だった。陸奥たちの「おとめチックロマン」ものにも、多くの若い男性たちが、それを受容する現象が広がったのである。この動きも、男性学・男性性研究の視点からみて、きわめて興味深いものである。この動きは、もちろん、現状の男性主導社会への小さな違和感から始まったものだろう。ただし、この違和感は、私が経験したような現状のジェンダー構造への根本的な批判につながるような違和感ではなかったと思う。むしろ、ここで強調されるべきなのは、小さな違和感を抱きつつ、大きな現状への「肯定」の感覚へと水路づけられるような流れの存在だっただろうと思われる。

違和感の背景には、当時、大きく拡大した男性主導の長時間労働、「闘い」「勝利せよ」という男性主導社会の動きがあったはずだ。男性読者たちは、こうした急激に拡大する男性主導の成長路線、競争路線に対して、違和感を抱いたからこそ、少女マンガのなかの、男性たちとは異なる世界に、ある種の「癒し」を感じたのだろうと思う。この時期、労働市場における男性の生活スタイルは、女性と比べて、はるかに単調かつハードなものであることが、若い男性たちにとって、ますます明らかになろうとしていた。人間関係の優しさや、ふれあいなどは、男性文化からはすっかり排除されつつあったのである。と同時に、そこには、女性をターゲットにした消費文化の多様性に対する、若い男性からの「うらやましい」といってもいいような「気分」も伴っていたのではないかと思う。若者消費文化の発達のなかで、若い男性を取り巻く消費社会も大きな

発展をみせた。それが、若者の政治的なアパシーを生み出す原因のひとつになったことも、すでに述べた。しかし、日本の消費文化をジェンダーという視点で見ると、そこには、女性の消費文化の側に、より豊富な多様性と選択が開かれていたことは明らかだ。

若い男性を中心にした、日本の男性の「女性化」現象は、この時期、つまり1970年代後半以後、繰り返し日本のメディアの話題になってきた。それは、1990年代のフェミ男現象や、羊男ブームから、最近の草食系男子論まで、形を変えて、何度も登場してきている。ここには、疲労し始めた日本の、あるいは国際的な男性主導社会への、男性からの疎外感とともに、女性文化の多様性や人間性に対する男性からの「うらやましい」とでもいっていいような気分の存在も、ひとつの原因として（もちろん、個々にはもっと考えなければならない多様な要因があるのだが）、考えられるのではないかと思う。

現在、SHOJOというカテゴリーが、マンガだけでなく、ファッションや生活スタイルも含めて国際化しつつある。1970年代の日本で始まった「SHOJO」カルチャーには、確かに、過去・現在・未来の女性をめぐる国際的また日本的なジェンダーおよびセクシュアリティ課題が、映し出されていると思われる。と同時に、男性というもうひとつのジェンダーの動向もまた、こうした少女文化との関連で考えてみる必要があることも明らかである。

私も、男性学・男性性研究者として、こうした課題に、もう少し踏み込んで考えていきたいと思っている。

参考文献

- 飯沢耕太郎『戦後民主主義と少女漫画』（PHP新書）PHP研究所、2009年
小熊英二『1968〈上〉若者たちの叛乱とその背景』新曜社、2009年
小熊英二『1968〈下〉叛乱の終焉とその遺産』新曜社、2009年
萩尾望都・蔦森樹（対談）「精神の両性具有ルネッサンス ——人間の可能性を一層広げるために性に対する従来の考え方を取り払う」『週刊SPA!』1991年7月31日号、扶桑社、36-41頁